

～互いのモヤモヤを共有する「もやモ屋」の活用～

新座市立片山小学校 関根 直樹

【実践報告の概要】

昨今、世間では様々な問題が毎日のように報道されている。未来を担う子供たちにとっても、教師にとっても、互いを尊重し認め合う多様性が重要である。

子供たち一人一人にも、また教師自身にも様々な背景がある。豊かな心や創造性を涵養するためには、教室にいる全員の思いをひろげ、つなげていくことが大切である。「わいわいタイム」「ミーティングボード」を活用し、子供たちが互いの価値観を大切にし、学びを深めていくことができるように授業を実践した。

【取組の具体】

① わいわいタイムの実施

番組視聴後、子供たちが感じた思いや考えたこと、導き出した結論など自由に発言している。しかし、一人一人が持つ考え・価値観を授業の中でひろげ、つなげていくためには、全体の中で発言して授業を展開するだけでは限界がある。発言の中で、周囲の友達と自由に話し合う「わいわいタイム」を適宜設定し、考えたこと、友達の発言を受けての思いなど自由に意見を交流させる。

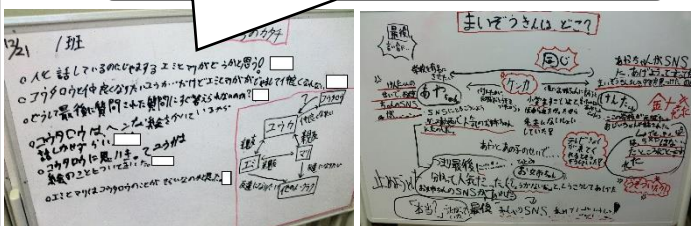
② ミーティングボードの活用

教室の子供たち全員が、番組視聴後に貴重な考えをもっている。友達の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたりする中で、さらに磨かれ、深まっていく。よりひろげ、つなげ、学びを深めるためには視聴後の時間がとても重要である。

互いのモヤモヤを共有するために、可動式ホワイトボード「ミーティングボード（本校の呼称）」を活用した。

左「ともだちのカタチ」  
右「埋蔵金はどこ？」

児童が書いた  
ミーティングボード



班ごとに配付するミーティングボードを中心に、子供たちは思い思いに発言していく。司会進行役がいなくても、次々に発言し、記録する子が位置付けていく。箇条書きする班もあれば、構造的に記入する班もある。班ごとに作り上げた板書を、教師が黒板の板書として位置付けていった。

左「ともだちのカタチ」  
右「埋蔵金はどこ？」

教師が書いた板書



【活用番組と実践者による番組分析】

もやモ屋

「もやモ屋」は、これまで放送されていた中学年向け道徳番組「時々迷々」と同じように、同世代の子供たちが様々な問題に直面し葛藤する姿が描かれている。その中でも、「もやモ屋」は10分間という短い時間の中に、複数の価値観が交錯するとともに、結論が出る前に終了することが多い。視聴する子供たちは、続きが気になり、話し合いがより活発になる傾向があると考えている。

【本実践における工夫点】

全教育活動の中での実践であること

子供たちが互いの思いを尊重するためには、道徳の授業時間だけでは不十分であると考えられる。日常場面においても互いの多様な価値観を尊重し合うことが重要である。そのため、全ての教育活動の中で「わいわいタイム」や「ミーティングボード」を活用した。

「わいわいタイム」では、何を話していいのかわからない様子も当初は見られたが、2週間程で素直に分らないことや悩んでいることなど話す様子がみられるようになった。

また、「ミーティングボード」を本校では3年前より全学年で活用している。プログラミング的思考ツールとして、話し合い活動の一助として、様々な場面でノートと同じような感覚で活用している。

この2つの取組が埼玉県放送教育研究会で実践している「意味場」と「空発問」の理論と合致していると考え、放送教育でも同じように活用することによって、より友達とひろがり、つながると考えた。

【本実践の成果と課題】

- 児童同士の話し合いがより活発になった。活発になればなるほど、自然と教師が番組を通して狙いたいと考える内容項目にも迫ることができた。
- 友達同士のやり取りの中で「ってことはさ、…」と発言する姿が多く見られるようになった。特に、番組は、読み物教材と違い、同じ土俵に立てるため、より深まりが顕著に見られた。
- 個々の話し合いが十分に全体へ広げられたのか、ミーティングボードと板書の両方を活かす学習展開であったのか、など十分な教材研究と児童理解が求められる場面があった。